



対談

司会：伊東先生の今回の講演で21世紀のアジアから発信するという発想は、これから人間が建築とどういう風なつながりで未来を設計するのか、これはみんなにとっても非常に重要なことだと思います。

岡河先生も今伊東先生と瀬戸内海を未来の建築の思考実験場とされています。

岡河先生からお話をうかがいたいと思います。

岡河貢：伊東さんと、瀬戸内海という場所で新しい文明と建築を考えようと思ったわけです。

その瀬戸内海の中の大三島という島に伊東さんの建築美術館があります。

その横に、伊東さんのご自邸である、東京にあったシルバーハットという住宅が移設をされています。

皆さんぜひ行かれるといいと思います。瀬戸内海の大三島にある伊東豊雄建築ミュージアム。

それで伊東さんも今日、自然に祝福される建築をこれからつくっていきたいということをおっしゃったのですが、20世紀の文明というのは、科学技術、テクノロジーを駆使するという意味で、自然を征服する文明であったと思います。

その文明だけでなく、もっと、ある意味で言うと、科学技術と自然とをひとつに結び付けるような文明というものを考えてみる方が、伊東さんの最近の建築を見ると、伊東さんの大きい方向ではないかと思うわけです。

私は自然と人間の関係を問題として、文明を築いてきたのは、日本もそうだし、中国もそうだし、アジアだと思います。

アジアの文明というのは元々自然と人間の、よい関係をつくり続けようとしたと言えるように思います。

その根底がアジア人には共有できると思います。

伊東さんより次の若い世代なのですが、伊東さんはすでに、自然に祝福されるという言葉の中に、科学技術が自然を征服するのではないありようで、建築と自然と人間を結びつける可能性というものにも、手掛かりをつかんでおられるのではないのでしょうか。

建築と自然の新しい関係を築くことが、今まで西洋でずっと構築されてきたものとしての20世紀の建築の、次の21世紀の建築の何かをスタートをできるかもしれないということを考えています。

今、瀬戸内海で自然と建築と人間、それから、ライフスタイルということも、含めて勉強を始めたということです。

シルバーハットの印象がありまして、東京の中野というところにあった頃に私も訪問させていただいたことがあります。

その時には、まさに東京の最先端の流行の風とか、それから東京という都市のある意味仮設的なバラック性とかそういうもの全部の流れの中にある空間に見えました。

それが瀬戸内海で見たときに、風が流れる、海の風景が流れる、そのような建築に見えました。

伊東さんと一緒に、これからの未来を、アジア人のつくる建築というのをいろんな場所で考えるひとつのきっかけになればと思うわけです。

司会：それは東京の流行も瀬戸内海で？

岡河貢：いや、それは違います。

シルバーハットが東京にあった時には、まさに流行の風の中に浮いているような感じがしたということです。

それで引き続き、伊東さんに少しその辺のイメージ、未来の建築をお聞き出来ればと。

伊東豊雄：いやもう、他のこんなにたくさんの方がおられる中で僕がこれ以上喋るのは、なんか申し訳ないような気がしてい



ダミーダミーダミー